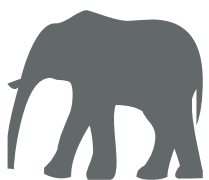


レッツ・グリーンマップ!

こどもや若者によるグリーンマップづくりのためのガイドブック



Let's green Map!!



みらいグリーンマップ・プロジェクトチーム



グリーンマップとは、^{せかいきょうつう}世界共通のグリーンマップ・アイコン（^{えもじ}絵文字）を使って作る^{かんきょう}環境地図です。これまでに、^{せかい}世界の41ヶ国、250の^{ちいき}地域がグリーンマップづくりに^と取り組んでおり、170種類のグリーンマップが^{はっこう}発行されています。（2004年7月1日現在）

そのほとんどが、^{しみん}市民が^{こじん}個人として^{そっせん}率先して作ったものです。^{こうきょうだんたい}公共団体が作ることもありますが、^{ばあい}そのような場合でも、^{とうろく}登録されるのは^{こじん}個人としてのグリーンマップ^{せいさくしゃ}制作者です。

グリーンマップが^{あつか}扱うテーマはさまざまで、^{こじん}個人が自分の^{しぶん}身近な^{みちか}環境を^{かんきょう}知るために制作するものから、^{エコ}ツーリズム（^{かんこう}観光）を^{もくてき}目的としたグリーンマップまで、^{きぼ}いろいろな規模のものがあります。グリーンマップのスタイルもさまざまで、^{もぞうし}模造紙に^か書かれた^{てつく}手作りのマップから、^{さいしん}最新の^{ちずじょうほう}地図情報システムを^{かつよう}活用したもの、^{こうくうしゃしん}航空写真を使ったもの、^{しやう}インターネット上で^{ていきやう}しか提供されていないものもあります。

グリーンマップには、「ユースマップ」(Youth Map)という^{ぶんるい}分類があります。子どもや学生によって^{つく}作られるグリーンマップで、1998年、カナダのカルガリーで^{さいしよ}最初に作られました。子どもの^{してん}視点から^{しゃかい}社会や^{かんきょう}環境を^なながめることで、^{げんじつ}現実に対する^{なんらか}なんらかの^{もんだいていき}問題提起の^ききっかけとなると思います。（^{おとな}大人が作るグリーンマップは、^{とうろく}登録をする^{ひつよう}必要があります。それはグリーンマップ・アイコンの^{まちが}まちがった^{しやう}使用や^{しやうぎやうてきりやう}商業的な^{ふせ}利用を防ぐための^{てつづ}手続きです。それに対して、ユースマップは、^{とうろく}登録せずに^{じゆう}自由に^{つく}作ることができます。）



ここに一枚の^{いちまい}世界地図があります。グリーンマップが作られている^{おも}主な国の^{ことば}言葉で「グリーンマップ」と表してみました。このように^{ことば}言葉が違^{ちが}うとコミュニケーションは^{こんなん}困難ですが、グリーンマップは^{せかいきょうつう}世界共通のグリーンマップ・アイコン（^{えもじ}絵文字）を使って、^{かんきょう}環境の^{じやうほう}情報を^{きやうゆう}共有します。

グリーンマップづくりの^{かくしん}核心は、^じ自分の目でまちを^{しゅざい}取材する、ということです。

グリーンマップ・アイコンを使った^{つか}気づきの手法により、身近な^{しゆほう}環境をとらえ直してみると、^{みちか}多くの^{かんきよう}発見があるものです。取材はひとりでも可能ですが、^{なほ}何人かの^{おお}グループでおこなうと、より多くの^{おお}発見があるはず

です。
その結果を、グリーンマップ・アイコンを使って一枚のマップにまとめ
てみましょう。

堀内正弘 ^{ほりうちまさひろ} グリーンマップ・^{きょうどうだいひょう}ジャパン共同代表



グリーンマップの^{そうししゆ}創始者、ウエンディ・ブラウアーさん。ニューヨーク在^{ざい}住のデザイナーで、1992年に最初のグリーンマップをニューヨークで^{つく}作った。
以前、日本に住んでいたこともあり、日本との関係は深い。1995年に^{きやうと}京都の^{ほうねんいん}法然院で開かれた^{てんねん}天然デザインフォーラムで多くのグリーンマップ・アイコンが^{つく}作られた。
1999年には、^{とうきやう}東京の^{たまひじゆつだい}多摩美術大学で開かれた^{じやうほう}情報デザインの^{こくさいかい}国際会議 Visionplus7 に^{しょうたい}招待され、それが契機となり、日本でのグリーンマップ活動が本格化した。2002年にはグリーンマップ・^せジャパンが世界初の^{けいせき}地域ネットワークとして誕生し、グリーンマップ・^{にほん}アトラスプロジェクトなどを^{かいはつ}米国本部と^{ちいき}協同で手がけている。



Green Map (カナダ)   

Carte Verte (カナダ)   

GREEN MAP (米国)  

Mapa Verde (キューバ)

Mapa Verde (メキシコ) Green Map (ジャマイカ)

MAPA VERDE (コスタリカ) 

MAPA VERDE (コロンビア) 

Mapa Verde (ブラジル)  

MAPA VERDE (チリ)  

Mapa Verde (アルゼンチン)

レッツ・グリーンマップ!

みらいグリーンマップ・プロジェクトチーム編

目次	ユースマップ世界ツアー	2
	グリーンマップ・アイコンリスト	8
	グリーンマップ・アイコンストーリー	10
	グリーンマップ・ギャラリー	16

Mahere Kakariki
(ニュージールランド・マウイ)

ユース・グリーンマップのはじまり

しゅざい ぶん なかしまあい か
取材・文 中島愛佳

「子どもにフレンドリーなまちはすべての人にフレンドリーなまち」
世界のグリーンマップ活動の中で最初のユース・グリーンマップを12人の少年少女と制作したマイケル・グレイさんは言う。

「フレンドリーなまち」とは、楽しい笑顔があふれ、住民同士が「友達感覚」でつきあえるまちだ。グリーンマップシステムのことを初めて知ったマイケルさんは当時、子どもたちが自然や社会について学びながら、実際にまち作りをおこなうプログラム「ビルディング・ブロック」を「チャイルド&ユース・フレンドリー・カルガリー」という組織でコーディネートしていた。

「グリーンマップは子どもたちが自分の暮らしている環境が“見える”最高のツールになる」

そう確信したマイケルさんは1998年、「ビルディング・ブロック」の夏休みの取り組みとして、子どもが主役のグリーンマップを作ろうと思い立った。

地図にしたのは、CFBカリーという元カナダ軍事基地。19世紀から旧イギリス軍によって使用され、陸軍士官の家族が生活していた家屋や建物、並木道、広いコンクリートのスペースなどがそのまま残る約80ヘクタールの土地だ。植物や野生動物（野鳥・昆虫）も多く生息するCFBカリーは子どもたちと探検するのにもっとも適した場所だった。

「夏休みの4ヶ月間は週3回、朝から



1998年の夏、カナダのアルベルタ州、カルガリーの少年・少女が一枚のグリーンマップを制作しました。

これが世界で初めて子どもが作ったユース・グリーンマップ第一号です。

夕方までフィールドワークと地図作りに取り組んだ。なんせ広くて自然と歴史がいっぱいの場所だからね。夏休みだったし、僕はできるだけ外で過ごすようにしたんだ。僕が用意したジャーナルを各自で少しずつ埋めていくんだけど、何をするか、どこへ行くかは子どもたち自身が決めた。できるだけ自由に楽しんで欲しかったんだ」と、マイケルさんは言う。

CFBカリーがユースマップにぴったりの場所だったことは間違いないが、彼にはもう1つこの地図を作る

明確な理由があった。カルガリー中心部からさほど離れていないこの地区は「市営住宅街地」として再開発が予定されていたのである。

「ただ地図を作るだけではなく、子どもたち自身が、行政やプランナーそれから地域の人の前で、自分の意見を発表したらどうか」とマイケルさんは考えた。

子どもたちが自分の体験をもとに何かを提言する機会を持つことは、コミュニティにとっても子どもにとっても有益なことだ。子どもはこのような機会が与

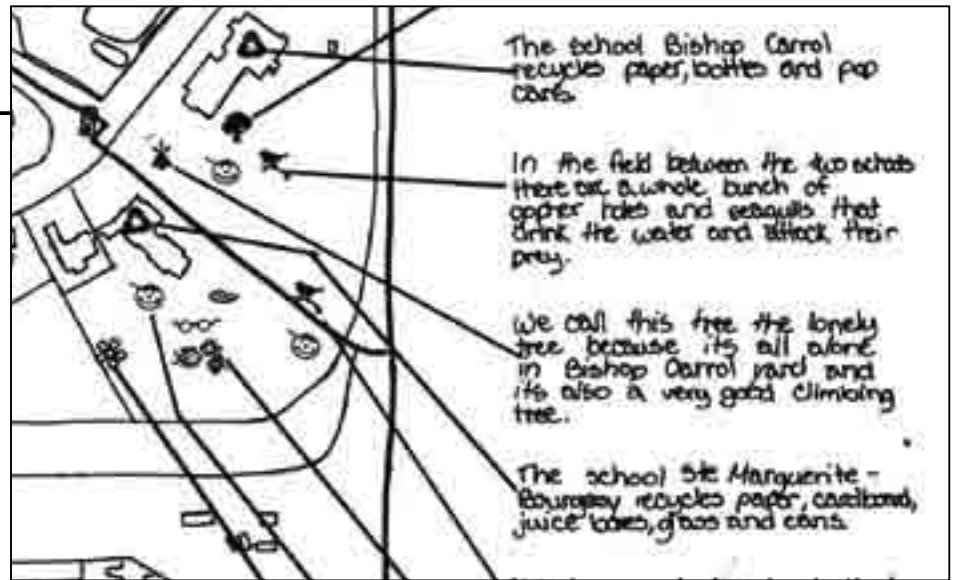
えられることによって、自分がコミュニティの一員であるという自信と自覚を持つことができる。地域で起きていることは自分と関係があり、どうすればよくなるか考え、提言していくことで状況を改善していくことができる、



きっと子どもたちはそんなことを学んだはずだ。逆に大人たちはグリーンマップを通して、独創的な子ども特有の視点（マイケルさんはこれを "kid-centric" と言う）を知ることができる。子どもの視点は大人の固定概念に新鮮な風を吹き込む。これはマイケルさん自身が子どもたちと地図を作る中で発見したことでもある。

「僕はこのプロジェクトを通じて、子どもは大人とは全く違ったまちな見方をすることを学んだ。子どもたちは、びっくりするような想像力と好奇心でスペース（空間）を捉えるんだ。たとえば、この元軍用地にはコンクリートの広い四角いスペースがあった。『こんな場所どうやって使うことができるんだろう』と僕は思っていたのに、子どもたちはそこを見た途端、『最高の遊び場だ！』と大喜びした。『ラジコンで遊ぶのにぴったり』とか『ローラーブレードができる』と

か『バスケットコートにも！』といった具合にね。『この広場だったらまわりの家からもよく見えるからお母さんも安心ね』なんてことも言ってたっけ。何も使えない場所だと思ったのに、子どもの目には大きくて魅力的な公園に映ったんだ」



▲記念すべきユース・グリーンマップ第一号。（一部拡大）

か『バスケットコートにも！』といった具合にね。『この広場だったらまわりの家からもよく見えるからお母さんも安心ね』なんてことも言ってたっけ。何も使えない場所だと思ったのに、子どもの目には大きくて魅力的な公園に映ったんだ」

カルガリーで生まれた 100%子どものためのアイコン

マイケルさんたちのプロジェクトは子どものためのアイコン、「子どもにやさしい場所（Child Friendly Eco-Site）」を生み出した。

マイケルさんたちは当初、オリジナルアイコンは作らず、当時のグリーンマップシステムの世界共通アイコンだけを使って地図を作る予定だった。しかしフィールドワークを始めた数日間で、それでは考えるようなユースマップが作れないことに気づく。なぜなら当時の共通アイコンには「100%子どものため」、つまり子どもの視点を活かしたアイコンが存在しなかったからだ。


子どもたちはかわいくてユニークなアイコンをいくつも作った（右参照）。その中でも帽子をかぶった子どもの絵がマークの「子どもにやさしい場所」と「虫の観察」の2つは世界共通アイコンに採用された。このアイコンは

125個ある世界共通アイコンの中でも特に人気のあるアイコンで、これを12歳の子どもがデザインしたと聞くと、みんな感心する。


プロジェクトに参加した子どもたちとは6年たった今でも、あの夏の体験がいかに楽しかったか話したりするそうだ。「ユースマップを作ったのは、僕にとっても子どもたちにとってもすごくエキサイティングな体験だった。僕らは地図を作る過程の中で、子どもや若者がグリーンマップを作ることから生まれる可能性を見出していったんだ」と、マイケルさんは嬉しげに語った。




カルガリーの子どもたちが制作した オリジナルアイコン




「子どもにやさしい場所」




「虫の観察」
※デザインは京都グリーンマップ、コンセプトはカルガリーがもとになっている。



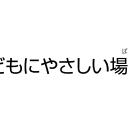
「雲の見える場所」



「子ども危険ゾーン」



「木登りができる木」



「ツリハウス」

「ビッグ・アップル=ニューヨーク」を「グリーン・アップル」へ



ニューヨーク

New York



▲ニューヨークの若者が制作した地図をいくつか紹介。

グリーンマップ発祥の地ニューヨークは、「ビッグ・アップル（大きなリンゴ）」の愛称で人々に親しまれている。北はハーレム、南はローワーマンハッタンまで、ニューヨーク・シティではこれまでに少なくとも20以上のグリーンマップが子どもや学生によって制作された。ニューヨークのキッズが織りなす地図はエッジの効いたこの街独特の都会的な匂いがする。彼らの作る地図の特徴はそのテーマ性と問題意識の高さにある。「ビッグ・アップル」を緑豊かで環境に優しい大都市「グリーン・アップル（青リンゴ）」へ。それが彼らの描くニューヨークの未来だ。

★GO グリーン・ニューヨーク★

ウェンディ・ブラウワーも顔見知りのグループ「リサイクル・ア・バイシクル（以下RAB）」を例に挙げてみよう。RABは自転車を修理する技術を教え、直したリサイクル自転車を販売することで若者を社会的に支援するNPO。RABは10代の若者を中心にその他にも様々な地域活動をおこなっている。グリーンマップもその活動の1つ。彼らはすでに5枚の異なるテーマの地図を完成させた。

ブルックリンのRABが2002年に作ったマップ「ゴグリーンNYC」を見てみよう。12歳から17歳の10人のサイクリストが夏休みに4週間かけてこの地図を作った。テーマは交通と

ヒューマン・パワー。毎日学校へ、仕事へ、数百万人の人が行き来するニューヨークは、空気が悪く、騒音もひどい。アメリカで一番、平均通勤時間の長い州でもある。RABのサイクリストたちは車に頼らないオルタナティブな（今までと異なる）交通手段の情報を載せた地図を作ることで、健康で地球を汚さない交通手段—自転車—の利用を同世代の若者たちに呼びかけた。自転車=ヒューマン・パワーというわけだ。

4週間の期間を使って、彼らは実際に街を自転車で走り、車以外のありとあらゆる交通手段—バス、地下鉄、フェリーなど—を試した。調査から分かったこと。それは、自転車レーンが少なく、道路にはたくさんのトラックが走り、交差点や橋は自転車では渡りにくく、ドライバーはサイクリストを邪魔者扱いする。ニューヨーク市は、決して自転車にフレンドリーな街ではなかった。RABは問題点を指摘するだけでなく、歩行者天国・自転車レーンの良い設置場所を地図に載せて提案した。問題定義をするだけでなく、解決策を自分たちで考え、主張するのがニューヨークのユースの心意気だ。

★ローマップ★

ニューヨークにはもう1つ、子どもたちが作ったようで作っていない、興味深いグリーンマップがある。グリーンマップシステムが2000年に制作したこの



▲ゴグリーンNYCマップ
▼リサイクル・ア・バイシクル（RAB）の若者たち



地図はその名も「ローマップ」。地図になっているのはマンハッタン島先端のローワーマンハッタンと呼ばれる地区だ。ローワーマンハッタンのマップだから「ローマップ」。グリーンマップシステムの本部（すなわちグリーンマップの創始者ウェンディー・ブラウワーのオフィス）もローワーマンハッタンにある。

「子どもたちの目に映る街の姿。それを大人も見ることができたらおもしろいのではないか」

そう考えたグリーンマップシステム



▲ローマップ。地図の挿し絵はすべて子どもたちが描いた。



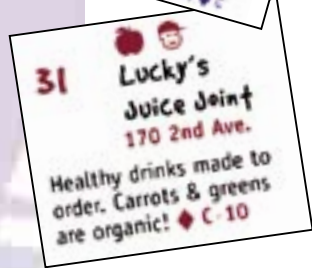
キューバ Cuba



音楽の国の子どもたちは グリーンマップを歌にした

現在、キューバは資本主義化が急速に進行し、昔からのコミュニティが失われてきている。そんな中で成長する子どもたちが未来に希望をもつのは難しい。家の近所にはゴミや蚊の沸く水たまりも見つかる。しかし、子どもたちはグリーンマップを通して、ひとりひとりの力で未来を切り開こうとしている。

グリーンマップ・キューバは小学校を拠点とした全国規模の国家プロジェクトだ。彼らは最初、紙を使わないで地面に絵を描き、全体の地図を作るときに初めて紙を使う。また、踊りと音楽が大好きなキューバではグリーンマップの歌が生まれた。自分たちのまちを、地球を大切にしていこうというラテンらしい情熱的な歌だ。



31. ラッキーズ・ジュース・ジョイント
ヘルシーな飲み物を注文できるよ。
ニンジンとグリーン野菜はオーガニック！
◆C・10 (サテライト・アカデミー・10歳)

NYCのユースがこれまでに制作した地図の例

- Pedaling Brooklyn's Gardens/ ブルックリンのガーデンを自転車で
"グリーンポイントからウィリアムズバーグのコミュニティ・ガーデンについて" 1999年 RAB ブルックリン
 - Are We Trashing the Apple?/ ニューヨーク (アップル) を台無しにしていない？
"ニューヨーク市のゴミ問題とそのいい加減な運送手段について" 2000年 RAB ブルックリン
 - Stop Fronting/ 沿岸の開発をストップ
"イーストリバーの海岸線をブロックしているのは誰？" 2001年 RAB ブルックリン
 - Go Green NYC/ ゴーグリーンNYC
"車を使わない交通手段" 2002年 RAB ブルックリン
 - Space to Breathe/ 深呼吸できる場所
"大気汚染と喘息について" 2003年 RAB インウッド
 - Newtown Creek Map/ ニュータウン・クリークマップ
"ブルックリンとクイーンズの間を流れる入り江の環境について" 2003年 イーストリバー・アプレントイスショップ
- くわしくは、グリーン・アップルマップのホームページ (<http://www.greenapplemap.org>) をご覧ください。

のメンバーは、今までにない手法で地図を作ることにした。子どもたちから得た地域の情報をプロのデザイナーの手によって1枚の地図に編集してグリーンマップを制作したのだ。

コーディネーターのベス・ファグソンは、ローマンハットンにある20以上の学校やクラブを訪れ、子どもたちからとびっきりの地域情報を集めた。一緒に外に出てまち歩きもし、子どもと若者延べ250人から情報が集まった。

ローマップのポイントは、「主観性の尊重」にある。地図に載せられたサイトの説明は全て子どもたちが書いたものだ。7歳から19歳という幅広い

年齢層で構成されているため、必然的に説明はサイトによってまちまちになる。あえてそのバラバラ感を残しつつ、情報提供者の所属する学校もしくはクラブ、それから年齢を表示することで、子どもたちの多様な主観を地図に反映させた。子どもたちの声が直接届くローマップはニューヨークの下町で生き生きと暮らす彼らの姿をかいま見ることができずばらしい環境地図になった。



Song 2 from Mapa Verde

Very important places even in ruins...
can be rebuilt
We are going to ask our council
and help them...
to achieve all that we need
The Green Map is going to be
a great success
Let's all join our efforts in the Green Map
Children, youngsters and the elderly alike

キューバ・グリーンマップソング2

廃墟でもとっても大切な場所...
きっと再び作れると思うから
僕たちはまちの寄り合いに頼んで
大人を助けるつもり
僕たちが必要としているいろんな事をするために
グリーンマップは、きっと成功するよ
グリーンマップに参加して一緒にがんばろうよ
こども、若者、そしておじいちゃんや
おばあちゃんにも一緒に



Kids Road Youth Map World Tour

せ かい ユースマップ世界ツアー③

オランダ



●トロモルチーム見参!

オランダの北ブラバント地方にある工業都市ブレダでは、2002年からマップメーカーのレナタ・フォクスさんを中心に複数の小学校でグリーンマップが環境教育として実施

されている。プロジェクトの名前は「トロモルチーム」。「トロモル」はオランダ語で「太鼓」だが、ここでは「ゴミ」を意味する2つの言葉



「トループ」 と「rommel」を合わせた造語としても使われている。「まちのきれいときたない、そのどちらにも目を向ける、遊ぶことと自然が大好きなわんぱく小僧のチーム！」それが、トロモルチーム(太鼓隊)だ。

●教室から外に出よう

レナタさんは主に経済的問題を抱える地区でグリーンマップを教えている。「決して裕福ではない地区で暮らす彼らにこそ自分たちの力で現状が変えられることを体験してほしい」からだ。そんな彼女たちの取り組むグリーンマップの教育プログラムは理論重視ではなく、まちに繰り出す体験型だ。

「すべての子どもたちが必ずしも始めからこのプログラムに意欲的なわけではありません。関心のない子や授業の流れを乱そうとする子もい

ます。しかし、子どもは自分で何かをすること、自分で創造することを本当に楽しみます。そして達成感を伴う体験からは多くを学びとることができます。ですから私たちのグリーンマップの授業は、たくさんの体験と行動を軸に成り立っています」

まずは学校の近辺をガイドとともに自然ツアーへ。子どもたちは、学校のすぐ裏を流れる小川には貝が生息するほど自然豊かであることを発見したり、川岸に近寄ってアヒルの子どもたちを間近で見たり、公園に咲いている花を摘んでブーケを作ったりしながら、「de natuur is om de hoek te vinden」(自然はすぐ曲がり角にある)ことに気づく。(子どもたちの作った)ブーケは今もドライフラワーとして教室で飾られている。

●子どもが見つけた子どものための庭

トロモルチームの活動は、行政からサポートされていて、それによりいくつかの画期的な、子どもによる

「まちづくり」が進められている。その一つが、コミュニティ・ガーデンだ。コミュニティ・ガーデンとは市民が自分たちで管理し、コミュニティのために大切にしている庭や庭園のことで、グリーンマップシステムのアイコンにも登場する。彼らのコミュニティ・ガーデンは市が2年間無償でトロモルチームに貸している「子どもたち自身」が管理する「子どもたちのための」庭だ。その土地も市が指定したのではなく、子どもたちが自身がまちを歩き、自分たちのコミュニティ・ガーデンにふさわしい空き地を探して選んでいる。最大限の自由を提供するところがいかにもオランダらしい。こうして選ばれた土地にハーブや花の種を蒔いたのもち



「子どもたちは、紙袋・タバコの吸い殻一つだって残すものかと大はりきりでゴミを拾っていました。路上のゴミ拾いは彼らにとって貴重な体験となったのです。それまでは平気でポイ捨てをしていたかもしれない子どもたちも、以前と同じように道路や公園を見ることは二度とないでしょう。」



ゴミ拾いをするトロモルチーム



(上)ゴミ回収車に美しいペイントが施されている。
(右)回収されたゴミはどこへ行くのだろうか？



ろん彼らだ。子どもたちが見つけた、子どもたちの共有の庭。今日も水やりや雑草抜きに、子どもたちが顔を出す。

●「何がゴミなの？」から

ブレダの小学生は「ゴミ」についても多角的に学習する。回収されるゴミや路上のゴミ、ゴミとは何なのか。自分たちの住むコミュニティのゴミ拾いにも行く。

「子どもたちは、紙袋・タバコの吸いがら一つだって残すものかと大はりきりでゴミを拾いました。路上のゴミ拾いは彼らにとって貴重な体験となったのです。それまでは平気でポイ捨てをしていたかもしれない子どもたちも、以前と同じように道路や

公園を見ることは二度とないでしょう。さらに何がゴミで何がゴミではないかという環境の問題も次第に気づいていきます」とレナタさんは語る。

それだけではない。まち歩きの中で子どもたち自身が見つけた“ゴミ箱が置かれていないためにゴミが溢れてしまっている場所”に、彼らはトロモルチーム特製のゴミ箱を配置したのである。通常環境学習ならゴミを拾って終わりであろう。もちろん「ゴミ拾い」はとても良いことだが、その効果は一時的でもある。レナタさんたちのプロジェクトの優れている点は、活動がゴミ拾いだけに留まらず、現状の改善に関わっていくことだ。行政の協力があって初

めて実現する。

特製のゴミ箱には大きく「トロモルチーム」と書かれたステッカーが貼られ、そのまわりには子どもたちの手形が貼られている。手は一つのシンボルであり、ゴミ箱に貼られた子どもたちの小さな手は少しずつでもみんなが「手を貸す」ことによって、コミュニティは良くなるということを私たちに教えてくれる。教育目的としてだけではなく、地域の生活環境の向上

に実際に貢献しているブレダの子どもたち。彼らは未来の担い手だ。



台湾



アジアでグリーンマップ活動が最もさかんなのは間違いなく日本だが、おとなり台湾の子どもたちも最近グリーンマップ作りに挑戦し始めた。台湾マップメーカーのジェン・



(左)台湾グリーンマップメーカーのジェン・ワンさん。

(下)集めた情報や素材をもとに地図を作る。



ワークショップに集まった子どもたちは、まずお互いの持ち寄った地図を見比べる。

「これはなんの地図？」

「僕の家はどこかな？」

それぞれの地図の目的や特徴を話し合う。

ワンさん(写真左)と環境保全組織の仲間は、楽しい活動を通して子どもたちにグリーンマップのコンセプトを知ってもらおうと1日ワークショップを企画した。対象はスタッフの子どもが通う小学校の四年生だ。

ワークショップ当日、はじめは生徒たちが持ち寄った地図を見比べる。「これはなんの地図？」「僕の家はどこかな？」目をきょろきょろさせながら、それぞれの地図の目的や特徴を話し合う。続いて、グリーンマップシステム・アイコンについてお勉強。「みんなの公園」、「再利用(リユース)」、「有機食品店」、「すばらしいながめ」など、アイコンを通じてグリーンマップのコンセプトと全体像を把握していく。

その後、子どもたちは学校内の探検へ。この日のワークショップは、安全を考慮して学校の敷地内で開催された。そこで、校内には自転車屋、有機食品店、環境団体など、本来ま

ちの中で見つけるお店や組織のブースを用意。各ブースには子どもたちが試せるちょっとした「遊び」の工夫がされている。

最後に集めた情報をグループごとに一枚の地図にまとめる。フィールドワークで集めた葉っぱがたくさん貼られた、色とりどりの心のこもった地図が完成。おとなが作る地図のように洗練されてはいないけれど、独創的で楽しいグリーンマップができた。そこには「子どもたちの観察した世界」が映っている。この「子どもたちの視点」こそ、ユースマップの醍醐味だ。



台湾の小学生が作ったグリーンマップ